< 鼎談 > アートと医療とコミュニティ：日常と非日常がもたらすヘルス

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2025-07-18
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 伊藤, 達矢, 稲庭, 彩和子, 西, 智弘
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://geidai.repo.nii.ac.jp/records/2000479

アートと医療とコミュニティ
― 日常と非日常がもたらすヘルス ―

「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」概要

「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」は東京藝術大学が中核機関となり、科学技術推進機構（JST）「共創の場形成支援プログラム COI-NEXT」の「本格型（共創分野）」に採択され、産学官連携で推進されている研究拠点事業。NEXT SDGsとして「こころの豊かさ」を掲げ、誰もが生涯を通じて自分らしくいられる機会をもち続け、幸福で健康的な生活を送れる社会を目指す。しかし、こうした未来のありたい社会像の実現を阻害するのが、超高齢化社会における「望まない孤独や社会的孤立」である。これを乗り越えるために、この拠点ではアートと福祉・医療・テクノロジー、コミュニティ形成を融合させ、多様な人々と社会とを結ぶ「文化的処方」を開発し、孤独孤立及び精神的貧困の解決に取り組む。これにより、「こころの産業」を創出し、幸福度の向上、生産的活動に参加する人口の拡大、社会保障支出の縮減及び、健康状態の回復・予防に係る継続的な効果を達成する。

鼎談者プロフィール

伊藤達矢（東京藝術大学 社会連携センター 副センター長/教授
/「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」プロジェクトリーダー）

東京藝術大学大学院美術教育専攻修了（博士号取得）。アート×ケアをテーマとし、藝大生と社会人が共に学ぶ履修証明プログラム「Diversity on the Arts Project（DOOR）」など、多様なプログラムの企画立案に携わる。共著に『美術館と大学と市民がつくる ソーシャルデザインプロジェクト』（青幻舎）、『ケアとアートの教室』（左右舎）等。

稲庭彩和子（国立美術館 国立アートリサーチセンター 主任研究員）

ロンドン大学（UCL）修士課程修了。2022年より現職。東京都美術館を拠点とした市民と協働する「とびらプロジェクト」や超高齢社会に対応する「Creative Ageingずっとび」などを企画。現職ではアートと健康とウェルビーイングに関わる企画を推進する。著書として『コウペンちゃんとまなぶ世界の名画』（KADOKAWA）、『こどもと大人のためのミュージアム思考』（左右社）等。

西智弘（川崎市立井田病院 腫瘍内科 緩和ケア 医師/一般社団法人プラスケア 代表理事）

2012年から現職。現在は抗がん剤治療を中心に、緩和ケアチームや在宅診療にも関わる。
また一方で、一般社団法人プラスケアを2017年に立ち上げ代表理事に就任。「暮らしの保健室」の運営を中心に、地域での活動に取り組む。著書に『緩和ケアの壁にぶつかったら読む本』（中外医学社）、『社会的処方』（学芸出版社）がある。

伊藤：よろしくお願いします。今回の鼎談では、アートと医療とコミュニティが連動することで、望まない孤独や孤立といった社会課題へどう向き合えるのかについてお話しができたらと思っています。西先生と稲庭さんには「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」にも加わっていただいています。この拠点の中では、望まない孤独や孤立をなくす取り組みとして「文化的処方」の開発を進めています。それは「社会的処方」という西先生がこれまで推進されてきたことを援用して、そういった言葉を使わせていただいています。まずは、この「社会的処方とは何か？」を掘り下げるところから、お話しを進めていきたいと思います。

西先生はお医者さんでがんの専門医でいらっしゃいますね？

西：はい、そうです。

伊藤：そこからイギリスで実装されている「ソーシャル・プリスクライビング（Social Prescribing）」に着目をして、日本語として「社会的処方」という言葉を当てられて活動を進められました。今、いろいろなところに影響を与えている言葉ですが、はじめ西先生が社会的処方に着目したきっかけや、これまで推進されてきた動機はどういったところにあったのでしょうか。

西：はい、僕は先ほど紹介されたように、がんの患者さんを専門に診ています。がんの患者さんを診察室の中で診ていると、治療のことだとか検査のこととか、そういった話は普通にするのですが、でも、患者さんの苦しみっていうのは痛みが取れたらそれでオッケーではなく、また抗がん剤を投与すればオッケーでもなく、むしろ自分が病気になってしまい、これからいったいどうやって生きていけばいいんだろうということを独りで抱えてしまう、独りぼっちになってしまう、そういう孤独感にこそ苦しみがあると気づいたんです。

それで、その孤独感を何とかするために、例えば病院の外の生活でも医療者とつながれる「暮らしの保健室」という活動をはじめてみたりしました。でも、「暮らしの保健室」でただ単に利用者さんたちを待っているだけでは、やっぱり届かない人たちもいるし、孤立・孤独っていう問題はがんの患者さんに限らず、もっとすごく幅の広い、それこそ貧困だとか社会的格差だとか、障害とか様々なものを含めた領域に広がっているとだんだん分かりはじめたんです。

そんな時に社会的処方という概念がイギリスから始まっているのを雑誌の記事か何かで読んだんです。それで、これはすごい考えだって思って、ちゃんともっと勉強して研究して、どういう実践なのか、どういう理論でやっているのかを日本の中でも紹介しなければと思いました。それが2017年ぐらいの話ですかね。

伊藤：具体的に社会的処方とはどんな取り組みなのか、例を教えていただけますか。

西：はい。社会的処方は基本的には薬で人を健康にするのではなく、人と人とのつながりと、人と地域のつながりを利用して人を元気にする取り組みです。例えば、いつも僕が例に出しているのは、小

さい花屋さんをやっていたご主人が「眠れません」といって病院に来た時に、睡眠薬を出されておしまいというパターンももちろんあるんです。でも、その人が眠れない原因を聞いてみると、例えば奥さんが亡くなってしまったことで本人が家の中にひきこもってしまって、それで独りぼっちでいることが原因だと気づくこともある。

ならば、医師の役割は薬を処方するだけでなく、町の中で花壇の整備をしているNPOの方々と一緒になって、そこでもう一度あなたのスキルを生かしてもらえませんかとつながりを処方することで、その人がもう一度その町の中で役割や生きる力を取り戻して、友達ができて、笑顔になって、それで眠れるようになるというストーリーがあってもいい、それがいわゆる社会的処方です。

伊藤：ありがとうございます。僕と稲庭さんは長らく2012年から東京都美術館と東京藝術大学の連携事業として「とびらプロジェクト」[1]をやっていて、ミュージアムを拠点にしながらコミュニティをつくることをテーマにした活動を推進してきました。そこでも今お話しいただいたようなソーシャル・プリスクライビングのストーリーを聞いて、これは我々にとってもすごく関係が深いことだと感じていたんです。

稲庭さんにはミュージアムの専門家としてお伺いしたいのですが、ミュージアムの専門家と聞くと一般的には、作品の保護とか作品の展示や研究など、いわゆる物を扱う仕事というイメージがありますが、稲庭さんもこのソーシャル・プリスクライビングに関心を寄せられている、その理由はどんなところにあるのですか。

稲庭：私自身はもともと美術史を学んでいたのですが、作品自体の研究よりも、人はどのように作品を享受してきたのかに興味が湧いて、つまりその作品があることで、人はどういう体験をして、どう影響を及ぼすのかに関心があったんです。また、日常的な関心として医療や健康や食事など、ヘルスケアにも強い関心があって、健康を支えるケアとアートには通底するものがあると思っていました。例えば昔から日常とちょっと切り離されたお寺だとか神社だとか、そういう宗教的な場は、何らか人をケアする場であり、そこは美術的な場でもあるといったようなことです。

それなので大学で学んでいた90年代ぐらいから、自分の関心のベースに「アートとケア」があって、ずっと変わっていないんです。そういう関心の中でソーシャル・プリスクライビングが出てきた時に、これは、これからの一番の関心事になると思いました。ただソーシャル・プリスクライビング自体は医療サイドからの視点が強いものだと感じられて、でも、それをミュージアム側から見た時に、それとどう手を結んでいくのかは、これからの21世紀を生きる人々の精神的な活動とその充実に関心が高まる中で、ミュージアムの活動としても非常に大きなファクターになると確信するところがあります。

伊藤：もともと、「とびらプロジェクト」がスタートした2012年時点でも、アートを介して、ミュージアムを拠点にコミュニティをつくっていくことや、ケアや包摂的な社会の在り方はすごく大きな

テーマになっていたと思います。でも、その時はそれが世の中のど真ん中で期待されることではなかった気がします。ただ時代が進むと、一昨年のICOMプラハ大会[2]で実に49年ぶりに変わったミュージアムの新しい定義[3]を見ても、ミュージアムの持っている本来的な機能性の中にケアが内在していることが明らかに言われて、包摂的な社会をつくることにミュージアムの役割が期待されていることが伺えますね。

稲庭：はい、アートと社会包摂についてもう少しお話しすると、先ほど西先生から社会的処方の説明で人と人や、人と社会、地域とのつながりをつくって元気にするというお話がありましたが、やはりキーポイントは「つながり」だと思います。つながりを生み出すのがアートの力で、それは例えば奈良の大仏のようなものもその一つかもしれません。過去においては、ああいう日常を超えた、宇宙とのつながりすら感じさせる体験をもたらしたであろう仏像とか、もしくは自然をめでるようなこととか、「私とあなた」という日常的な人の関係性を超えて、何かに思いをはせ、時間を超えたり、日常の物差しを超えて何かにつながる感覚を得られる。それはすごく人の癒しになっている。だから自然を愛したり、めでたりする気持ちと、アートをめでる気持ちはすごく近いものがあって、それは結局は人に、自分が世界に存在することのへの受容感、つまり「私は今ここに生きている」という肯定感が生まれる元を、そうしたつながりが支えているのだと思うんです。

だから、ミュージアムの中にあるいろいろな作品は、そうしたつながりを強くする作用があるからこそ、その物が人々の大切なものとして引き継がれてきたのだと思います。

なおかつ、人が次の世代に作品をつなぐこと自体、誰かにつなぎたいという誰かの主体的な思いがつながっているからできることなのですが、時代を超えてそれを目にする時、その作品が偶然にも自分に渡されたという感覚が作品を見た時にもたらされる。それが人とこの世界とのつながりを強く感じさせるのだと思います。

西：面白いですね。僕、今このプロジェクトはすごく難しいことをやろうとしているんだろうなということをひしひしと感じていて。アートが一般的に人にとっての癒しになるというような表面的な言葉を使うなら、さっきの仏像や自然の話もそうで、何か美しいもの、雄大なものに囲まれていれば人は癒しを感じますよね、というのはすごく簡単だし、そうですよねと思うんです。だけど、じゃあそれを感じるのはなぜなのかを言語化しようと試みているからこそ、それは一段階深くなって、すごく難しいけど、すごく面白いなと思って聞いていました。

そこで僕がまず一つ思うことは、アートを介した人と人とのつながり方とか癒され方といった視点で言うと、以前稲庭さんがお話されていた、アートの前では病気があろうが障害があろうが、大人だろうが子供だろうがみんながフラットになれて、そのフラットな関係性の中で、お互いがこの人はこう考えている、この人はこう捉えている、でも自分はこう感じていると、その三角形のコミュニケー

ションの中で新しい価値が生み出されていくといったお話を思い出しました。つまり、アートがぽんと人と人との間に入ることによって包摂的なコミュニケーションがより容易になる。それは一つの好事例なのだなと感じたんです。

でも一方で、前に社会的処方の本を書いた時に「アートを何だと思っているんだ」という批判を美術関係者側から割と受けることがあって。つまり、アートはそれ自体自立していて美しいんだから、それを利用して人と人との関係性を作るとはけしからん、という専門家の方々がいらっしゃって、なるほどなと思っていたんです。だけど、最近僕が思うのは、先ほどの仏像や自然もそうですが、そのものが持っている力や受け継がれてきた伝統とか、そこに込められた祈りだったりとか、そういったものと自分が直に対峙した時に受ける感覚と言うんですかね、それがやっぱりケアにつながることもあるよねって思うんです。

伊藤：その場や物に込められたパワーを浴びるようなような。

西：そう、それにつながる話なんですが、今回、新しい社会的処方の本を出す時に、小杉湯[4]さんっていう銭湯のお話を入れたんです。小杉湯さんは、高円寺で100年ぐらいかな、たってる建物で、もう重要文化財なんですよ。その銭湯ではみんなが癒されていて、ケアのかいわいでは小杉湯ってすごく有名なんです。けど、何で有名なんですかねって話をオーナーの方にした時に、別に僕らは特別なことは何もしていませんと話をされました。銭湯の番台さんだとか、中の人たちがすごく積極的なコミュニケーションを取っているからケアなんですかって話をしたんですが、そうじゃないと。自分たちがここの場を100年間近く育ててきたこと、ここがあり続けて、銭湯で気持ち良くお湯を使ってもらいたいというその思いが込められているし、それを守ろうとしている人たちと、この伝統を育ててきた人たちの思いがそこに込められているからこそ、その場に接続することによって、人が癒されるだとお話をされてました。

そういった「場」を通じたコミュニケーションのやり方があるんだということを、その時に教えてもらって、だから、アートも結構それに近いところがあるのではないかと。そこにある、何百年と受け継がれてきた伝統にある祈りだとか、その作家がその作品に込めたメッセージとかに近いかもしれません。

ちなみに、僕がちょっと疑問に思っていたことですが、それこそ若いアーティストとかが独り善がりな作品、自分を見てくれっていう思いを作品に込めてたものが結構あるって話を聞いたことがあって、でもそういうのはアートの世界の中で評価され難いと。最近そういう話をいろいろなところで聞いて、やっぱり自分を表現するだけの、独り善がりな作品を創るんじゃなくって、作品を通して周りの人たちや後に続く人たちとコミュニケーションを取っていきたいという思いが込められた作品は人の心を打ったりするのかなと思うんですけど、どうなんでしょうか？。

伊藤：これは捉え方はいろいろあると思うんです。僕はアートは個人的な視点から生まれるということはとても大切だと思うんです。ただ、その個人的な、言わば主観を突き詰め、掘り下げてゆくと、ときに誰かの共感や普遍的な価値観に到達することがある。難しい言い方をすると、間主観とか共同主観とかといいますが、そこに掘り下げていける力は、アーティストにとって非常に重要な力だと感じています。だから、意図して共感をつくろうとするというよりは、互いの主観同士が結びつく水脈にたどり着くといった感覚でしょうか。

また違った見方をすれば、そこに掘り下げていける力こそが、我々のアートを介した共創拠点における研究力であるとも感じています。

今回の「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」は、科学技術振興機構（JST）の競争的資金を獲得して行っている事業なので、当然サイエンスが大きなテーマになっています。すると、研究成果に再現性だったり客観性を求められます。もちろんそれはとても大切なことだと思います。でも、すごく個人的な思いや関心を大切にし、その先でいろいろな人たちの心が動く瞬間を捉える、そういうアプローチができるアートの力がないと、この拠点で取り組もうとしている孤独や孤立の問題に向かい合えないのではと思うんです。

稲庭：そうですね。ミュージアムの活動でも、伊藤さんが言っていた間主観や共同主観はすごく大事なポイントですね。作品がこの世界に存在して、社会に、人に、どんな波紋を投げかけられるか、それが作品の質に関わるというのがあると思いますが、自分と他者の両方の主観が共有されるレイヤーの存在によって、自分と他者との思考を行ったり来たりできるような体験がもたらされる、そんな作品はすごく魅力的だと思います。展覧会をつくる際にも、そうした構造が必要で、展覧会は基本的に個人で楽しむのですが、楽しんでる時に個人の状態と、もっとメタの領域というか、他者との領域、宇宙との領域のようなところにちょっと行ったり来たりできる展覧会構成だと、充実した鑑賞体験になるように思います。作品にしても展覧会にしても、間主観や共同主観というのは重要な要素ですね。

伊藤：作品を介したつながりに関しては、今の時代で言えば、文化的背景が違った人たち同士で何かの価値を共有できるようなポイントになるかもしれないし、世代を超えて子供から高齢の方々も対話の機会を持ち得たり、多様な価値の交換が起こるポイントになるかもしれない。

また作品は人の寿命よりも長く残るので、100年前に創った作品はその瞬間のその作家の言葉を100年間語り続けてくれたりとか、この先もさらに100年200年と時を超えて語り続け、時間を超えて人をつなげてくれるようなものだってある。そういった点は先ほどの銭湯の話とよく似ているし、そういう作品がつないでくれる場のあり方と、西先生がお話しされていた銭湯のような場のあり方を重ね合わせると、薬ではなくて社会と人がつながり、その人が回復していけるような場づくりへのアプローチの方法が見えてくるように思いました。

ただ、具体的なアプローチの方法は、その対象となる社会の形に寄り添って考える必要があるのかなと思っていて、特に最近は、人と社会との関係性を考えてゆく上で、今の時代にあったコミュニティの作り方をもう一度考え直していくことが求められていると思います。例えば、昔は、地縁とか血縁というある意味安定したコミュニティがあった。あと、会社縁もそう。入社すると退職するまで同じ会社にいる時代は、社員同士がファミリーみたいになっていることも結構あったと思うんですけど、最近は一回入社したら六十何歳まで一つの会社で働き上げるなんてことは少なくなってきていて、会社縁みたいなものもない。

そこでよく言われるのは、多様化する社会の中では、絆と呼ばれているような地縁や血縁といった数は少ないけど所属意識の強いつながりだけではなく、もっと緩やかで弱いけどたくさん選択肢のあるつながり方の両方が今の時代の中では必要で、むしろそのバランスが大切だと言うこと。だからソーシャル・プリスクライビングを考えるとき、この社会というものは、一体何によって結びつきあっていられるのかということの捉え方がすごく大事なんだと思うし、西先生がお話されているそれは、制度とか仕組みみたいなことよりは、たぶん人の息遣いとか、その場の温度のような感じなのかなと捉えていますが、いかがでしょうか。

西：僕の中でそれを定義するのはいろいろ難しいんですけど、自分はここにいてもいいんだって思える感覚を持てる場というんですかね、そこが自分の中では大きいと思っているんですよ。だから、さっき言った銭湯とかも、銭湯という場を通じて自分はこの町に暮らす一員として見られてるというか、自分はこの町にちゃんと接続しているんだって思えることが大事だと思うんです。だから誰かとコミュニケーションを取ったとか、いつも会う友達がいるとか、それも大事なんだけども、それだけではないように感じています。

伊藤：その場の文脈に結びつくということですか。

西：結びつき方にもよるかと思いますが、先ほど少し偉そうにアートのことを語りましたけど、実は僕、アートを見るのちょっと苦手なんです。僕の知り合いとかは結構、展覧会とかに行って一枚の絵画とか見たら、うわっと涙を流すような人とかもいて、僕、アートを見て涙を流すとか全然理解できなくって、何で一枚の絵画とかを見るだけで涙が出るような体験ができるんだろうって。

それはたぶん、何ていうのかな、例えば英語と日本語で話してるみたいな感じっていうんですかね。向こうは一生懸命英語で語りかけてくれてるのに、僕は日本語だから何を話しているか分からない感じになっているんだと思うんです。でもアートを受け取れる人っていうのは、例えば英語ならば、こっちも英語で聴き取れるように理解できるから、それで感動して涙が出るみたいな感じの体験をされてるのかなと思ってて。

そんな時に僕、「とびらプロジェクト」を担当されている特任助教の小牟田さんから「アートコ

ミュニケータが活躍してる展覧会があるので来てください」と誘われて、チケットをもらって行ってきたんです。

稲庭：東京都美術館で、この夏に開催していた「荒木珠奈展」ですね。

西：はい、そうです。そこにはアートコミュニケータの方々がいて、いろいろアートと人を接続する方法を、言葉を使ったりパフォーマンスを使ったり、実際僕が参加できるように促してくれて。そこにアートコミュニケータが入ることによって、こんなに豊かなアートの体験ができるんだってことが、その時に分かって、そういうのはすごく素晴らしいなと思ったんですよ。

だから、実はアートっていうものが入ってきやすい人と、全然駄目っていう人がやっぱり世の中にはいるので、そこを病気であるとか障害があるとか、学歴がどうだとか、大人とか子供とか全然関係なく、つながる回路が無い部分っていうのかな、そこをうまくコミュニケーションを図ることができればアートの可能性ってかなり広がるんじゃないかと思うんですよね。

はじめ、僕もどちらかというと美術館っていうのを敬遠しがちだったのは、理解ができないから、そこのコミュニティに入っていけないっていう感覚をすごく持っていたから。でも、いろいろな活動をしたり、アートコミュニケータのことを知ったりして、ようやく少しずつ理解できるようになってきました。そうなってこれたのは、美術館側がどうすれば、このアートが語る声を人に届けたり接続することができるんだろうって考えてくれているからだと思うし、その声を聴けると、美術館って場所に自分もいてもいいって思える人はもっと増えるだろうし、アーティストたちが伝えようと思ったメッセージを聴けると、また自分の中で新たな考えが生まれてくるのではと思いました。

そんな風にして、社会と自分が、アートを通じてつながっていけるのではと考えたりしてます。

伊藤：なるほど。ミュージアムが持っている力とか、アートが持っている力を社会に接続させていくにはいろいろなやり方があって、そこの部分については、きっと国立アートリサーチセンター[5]もこれからいろいろと力を尽くされていくんじゃないかなと期待しているんですが、どうでしょう。

稲庭：この春からはじまった国立アートリサーチセンターのミッションは、まさに「アートをつなげる、深める、拡げる」なので、ミュージアムやアートが持っている力を社会に接続させていくことを目指しています。アートには、作品自体の審美的な価値、そして経済的価値、そして社会的価値があります。作品自体の審美的な価値は美学や美術史学などで研究されてきました。経済的価値についてはアート界隈のビジネスも多様に発展してきました。しかし、アートの社会的な価値の研究はいろいろな分野にまたがる領域でもあり、これから研究や実践が発展していくところだと考えています。例えば、私たちの社会の中で、私たちはアートをどう体験し、どう社会としてそれを携えていくことで、より良い社会にしていくのか、そうした研究はまだはじまったばかりで。やっとこの20〜30年ぐらいで、そうしたアートの社会的価値の研究が進んできています。その中でアートがヘルスとかウェル

ビーイングに大きな意味を持っているのではないかと、ここ10年くらいで研究が非常に増えたわけです。美術界隈の人にとっては感覚的には、もとからあたりまえにあるアートの機能なのだけれども、改めてアートを審美的価値と経済的価値と、社会的価値と位置付け直して、さらにはそのエビデンスを求めるようなことにもなってきていて、その社会的価値ということ自体が日本の美術関係者の中でもまだうまく言語化されていないと思いますし、そこに意義を見いだしている専門家も少ないので、これからそのアートの社会的価値を可視化するような研究をやっていく必要があると思います。

伊藤：稲庭さんの話を聞いて、アートの社会的な価値について探求していく上ですごく大事だなと思うのは、アートの側にいる我々が、いろいろな人たちと対話をする機会を増やしていくことだなと思いました。今回、医療とか福祉とか、まさに西先生みたいなお医者さんと一緒にこうした対話ができるのは非常に重要な機会だなと思っています。

ただ西先生のような、もともとアンテナの感度が高くて、社会的処方にしても、これは大事だと感覚で分かって動いていける方がお医者さんの大部分ではないだろうなとも思うんです。それなので僕らはもっと医療の関係の方を含め多様な分野の人たちと、一緒に対話していけるようなプラットフォームをつくる必要があると思うのですが、どうしたらもっと広がっていけるだろうかと。その辺り、西先生はどう思われますか。

西：どうなんでしょうかね。もし医療とつながっていくことを考えた時に、分かりやすいのは一番最初に言った、アートを見ると癒されるよねの世界なんですよ。だから、美術館の無料チケットを処方するような取り組みが生まれるんですよね。今、僕らがお話ししていることってすごく深い話で、僕はすごく面白いんですけど、全ての医者にそれを求めるのはまあ無理で、例えば認知症のある人たちに美術館の無料チケットをお渡しして、患者さんたちに来てもらうようにする取り組みはすごく分かりやすいと思うんですよ。あくまで入り口としては。その上で、実際そこに来てくれた方々に対してどういったプログラムを提供するのか、アートコミュニケータの人たちが認知症の方々とどう関わるのかだと思うんです。それによって、本人だったり、その家族の価値観が転換されるような体験があった時に、それを今度、こんなすごい体験ができたんですよと、実際に患者やその家族から医療者に伝えてもらうと、驚きを持って医療者側に持ち帰ってもらうことができるのではと思います。

だから、僕は美術関係者が医療者に直接話をして「こんな価値があるんですよ」って言ってもなかなか伝わらないのではないかと思っていて、患者さんたちを通じた価値の伝え方をやっていくと医療者のほうも、そんなに変わるんだとか、そんなにいいことがあるんだって実感してもらえるんじゃないかと思うんです。やっぱり医療者って、どこまでいっても自分の診ている患者さんたちが良くなったり幸せになることが、自分の幸せだと思っている人たちで、患者さんの声こそが一番のインパクトになると思っています。

稲庭：アートの側でも他分野とつながる鍵となるのは、美術館とか美術の専門家ではなく、アートとケアに関心のあるアートコミュニケータのような人たちだと思います。社会的処方の話にたとえるならリンクワーカーでしょうか。専門家だけにならず、アートやケアに関心を持って生活している方々とどう対等に共創するかが大切だと思いました。

「とびらプロジェクト」を運営して思うのは、そうした多様な人たちの、掛け合わされるパワーは想像以上に大きいということです。例えば美術に関わりながらケアも一緒に考えたいとか、そこに自分のエネルギーを投じることで何らか他の人がケアされたり、もしくはそれによって逆に自分がケアされるということに価値を見いだす方々は予想以上にたくさんいることを実感しています。

ですがそれは、人が動ける仕組み、プラットフォームや目指す理念の共有がないとその活動が触発されないという現実もあって、そのコミュニケーションの仕組みづくり自体が、今最も開発が求められるところだと思います。いろいろな力を持っている個々人が、アートとケアって面白いなって気が付いて、自分たちの力を発揮し合って、自分の関心を活動として形にしていくことを支えるような仕組みが地域にもっとたくさんあれば、医療とアートのつなぎ合いができるような気がします。とはいえ、全然分野の違う人が知り合うのってすごくエネルギーが要ることなので、結構時間はかかる。5年とか10年とかいう単位でその仕組みを支え続ける方法を私たちはこの共創拠点の中で見つけていくことができたらいいんじゃないかなと思ってます。

伊藤：美術館を含め、音楽ホールなどの文化施設もそうした仕組みを支える社会装置となっていければいいですね。

西：そうですね。でも、美術館などは先日足を運んでみて、やっぱり非日常だなって思ったんですよ。社会的処方として推進する上では、やっぱり日常に近い生活の延長上にそういう力があることが必要だなって思うんです。でも、アートに触れ合う機会っていうのはかなり非日常のことが多くって。

そこで質問なのですが、美術館関係者からするとアートは非日常でいいという考え方で進もうとしているのか、それともアートを日常に接続させることが大事だと捉えられているのか、どうなんでしょうか。

稲庭：私は、人を非日常的時間につなげるアートの機能がすごく重要だと思っています。それは精神的なケアとして非日常の時間を持つことが、セルフケアに重要なことだと思うからです。瞑想（めいそう）とかも日常の時間からいったん切り離されるように。ほかにも例えば子供だったら、お母さんが絵本の読み聞かせをしてくれて、絵本の中の世界に入る時間だとか、そういった日常の中にあっても、一瞬この日常の時間を忘れて別の世界にトリップする時間がとても大切で、祈りなども結局はそうだと思うんです。

だから、美術の展覧会は非日常の空間としてつくることが多いです。日常と非日常を行き来させる

のは、アートの機能なのだと思います。ですが、西先生が言うように、何かもっと日常との接続のしやすさがあるといいですよね。例えば「暮らしの保健室」みたいな、すごく日常に近く設定されている場所で、アートコミュニケータなどが介在したり、何らかアート的な活動があることで一瞬日常から非日常にトリップできる、そしてまた日常に戻ってくるような往復ができると、すごく精神的なケアになるだろうと思ってます。

西：なるほど、よく分かりました。今のすごく重要なことだと思いました。やっぱりアート自体は非日常なんだけれども、それが日常の中にも存在するという状態が、つまり日常の中に非日常があるっていうのが大事なんだろうなって。

稲庭：そうですね。あと誰かの非日常につながるのも結構いいんだと思うんですよね。例えばコーラスを聴いて感動したり癒されたりするのも、その歌っている人たちの非日常に接続する感じが、自分を癒すことにつながるのかなと思います。

伊藤：まだお話しをしたいのですが、時間となりました。アートと医療とコミュニティを横断して考える上で、今回の鼎談は非常に重要な機会になりました。「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」はまだ初年度ですが、これから皆さんのお力をお借りしながら、望まない孤独・孤立へのアプローチを充実させていきたいと思います。ありがとうございました。

注

1　東京都美術館と東京藝術大学が連携し、美術館を拠点にアートを介してコミュニティを形成し、社会課題を視野に入れて活動することを目的に推進するソーシャル・デザイン・プロジェクト。およそ130名のアート・コミュニケータ（愛称：とびらー）と共に活動を展開している。

2　ICOMは、博物館の進歩発展を目的として創設された国際的な非政府組織。世界各地の博物館及び博物館専門家が、倫理的基準と革新的実践について話し合い、交流するためのグローバルなコミュニティである。1946年の創設以来、博物館及び博物館に委託された遺産の保護と振興に取り組んでいる。2022年はチェコ・プラハで大会が開催された。

3　「博物館は、有形及び無形の遺産を研究、収集、保存、解釈、展示する、社会のための非営利の常設機関である。博物館は一般に公開され、誰もが利用でき、包摂的であって、多様性と持続可能性を育む。倫理的かつ専門性をもってコミュニケーションを図り、コミュニティの参加とともに博物館は活動し、教育、愉しみ、省察と知識共有のための様々な経験を提供する。」

4　2021年１月、国の登録有形文化財（建造物）に登録。

5　独立行政法人国立美術館 国立アートリサーチセンターとは、アート振興の新たな拠点として、アートの持続的な振興の原動力となり、アートの社会的価値の向上に貢献し、アートを通して私たちだれもが新しい価値や可能性を見出せる未来をめざすことを目的とした機関。